

2日目 上尾 -3.7Km-> 桶川 -7.2Km->鴻巣 -16.4Km-> 熊谷

上尾駅スタート

2014年9月13日(土)、JR高崎線上尾駅をスタート、時刻は午前7時、天候は曇り。5時に大森を出た時にはさほどでもなかったのに、半袖Tシャツでは肌寒い。海岸部と内陸部では温度差がある。歩いていけば温まるさと旧中山道を歩き始める。

桶川宿 6番目

上尾から1時間弱で6番目の宿場の桶川に到着する。宿場の入口に木戸跡があり、宿場の案内があって比較的整備されている。この地では、江戸時代から染料として紅花の栽培がはじまり、桶川臙脂(えんじ)の名で有名だったとのこと。まず目を引く旧家は桶川の特産品である紅花を商っていた矢部家で、土蔵造りとなっていて、2階の土蔵窓が目を引く。また3階建ての土蔵もあった。この3階建ての土蔵は、飢饉の時に多くの人を雇用して建築し、お助け蔵と呼ばれたとのこと。旅籠の雰囲気を残す旅館も現役で営業している。本陣は残っておらず、跡を示す碑と門のみである。紅花饅頭の看板があったが、早朝にて売っていなかった。

矢部家住宅



3階建ての土蔵



商女館

その看板に一瞬ドキリ、よく読めば商工会議所の女性部の建物なのだが、当方の考えがいやらしいせいなのか、連想が良くない。或いは、案外それを考えての、ドキリ狙いかも。

大雲寺と女郎買地蔵

宿場のはずれにある大雲寺の地蔵は夜な夜な女郎を買いに行く為、困った和尚が地蔵の背に錠(かすがい)を打ち付け、鎖でつないだそうである。

街なか商女館



写真の3体の地蔵の、向かって右側の地蔵がそうで、他の2体が面長であるのに対し、右側の地蔵は丸顔で、結構柔らかな感じである。確かに、その背中に「かすがい」がうちつけられていて、痛々しい。 女郎買のお金はどうしたのだろうか、賽銭を盗んだのか?



3体の地蔵



女郎買地蔵の背中

かすがい

北本宿

桶川から1時間程で北本宿に到着、ここは昔は鴻巣宿として宿場町だったが、宿場は江戸時代に現在の鴻巣に移転し、その後、この地は元(本)の宿として本宿と呼ばれるようになった。

多聞寺と言うお寺があり、その境内に天然記念物の「むくろじ」がある。

高さ27m、樹齢200余年とのこと。

「むくろじ」って聞いたことの無い木だなと思い、ネットで調べると

「庭木で使われ、実は羽子板の羽根に使われ有毒植物」とある。

羽子板の羽根に使われる楕円形の黒い実がそうなのか。

実は砕いて石鹸の代わりになり、薬としても使用されたとのこと。

天然記念物のむくろじ



鴻巣宿 7番目

鴻巣は宿場の遺構は何も無いが人形の町、人形の店が多く、看板が華やかで、通りが全体として色づいたように見え、ショーウィンドウには雛人形だけでなく、色んな人形が飾ってあり、五条大橋の義経と弁慶の人形もあった。

町の中に産業観光館「ひなの里」があり、江戸時代から明治、大正、昭和、平成の雛人形が飾ってあり、絵本を再現した人形もある。また、鴻巣は花火の里、「尺玉」が飾ってあった。



鴻巣とコウノトリとパンジー ネットで調べると、「一時この地が武蔵の国府となったことから、「国府の州（こくふのす）」と呼ばれた」のが「こふのす」となり、更に「コウノトリ伝説」から鴻巣の字を当てたとのこと。

「コウノトリ伝説」とは何かと調べた、長い話なので結論のみ書くと、コウノトリが悪を退治し、この地に平和と反映をもたらした。それで、歩道にはコウノトリのタイル絵がある。また、鴻巣市の花はパンジーとのことで、マンホールのフタもパンジーがデザインされている。

鴻巣の歩道のタイル絵



鴻巣のマンホールの蓋



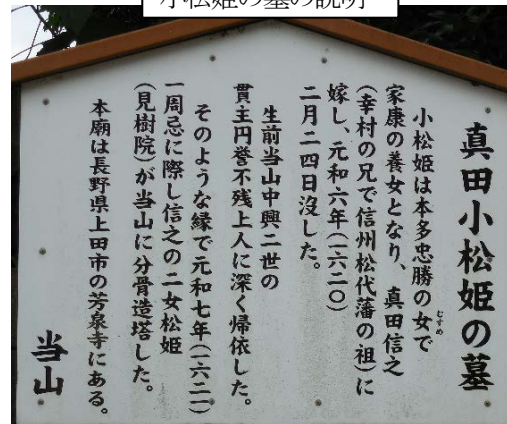
勝願寺

宿場にある勝願寺に寄り道、ここには真田信重と小松姫の墓がある。信重は真田幸村の兄の信之の子供で母は小松姫、信之は本田忠勝の娘である小松姫と結婚することによって徳川方となり、父と弟は豊臣方として敵味方、どちらが勝っても真田一族は生き残る。

真田信重と小松姫の墓



小松姫の墓の説明



真田一族のことを書いた池波正太郎の「真田太平記」を思い出した。あれは面白かった。

勝願寺の門の左右の仁王が、どこかユーモラス。

それと、本堂の欄間、普通は木彫りなのにここは非常に珍しく、漆喰の浮き彫りとなっている。獅子が描かれている。

右側の仁王



左側の仁王



本堂の欄間の浮き彫り



鴻神社

鴻巣の鎮守である鴻(こう)神社に「なんじゃもんじゃの木」があると言うので寄り道した。さぞヘンテコリンな木と想像していたら、ごく普通の木で、花は美しいのに誰も木の名称を知らなかったので「なんじゃもんじゃ」と言うようになった。今は、なんじゃもんじゃ稲荷として、願いを叶えるらしい。木の正式名称は「ヒトツバタゴ」

なんじゃもんじゃの木



なんじゃもんじゃ稲荷



吹上で昼食

鴻巣から次の宿場の熊谷まで 16.4Km と長く、その真ん中あたりに吹上がある。せっかくここまで来たのだからと、JR 吹上駅からバスに乗り、中山道を離れて忍城に寄り道。

正午頃に JR の吹上駅に到着して忍城行きバスが 20 分後に出るのを確認し、昼食を取ろうと 1 軒だけあった喫茶店には行ってパスタのランチ、900 円也。ところがそのパスタの出来るのが遅く、食べ終わって店から出た目前でバスは発車。次のバスは 30 分後で、やむなく喫茶店に後戻りしてアイ스티ーを飲みながら読書をして休憩。

のぼうの城、忍城

吹上駅から 20 分程バスに乗り、忍城に到着、甲冑を着た侍がお出迎え。

まず、行田市郷土博物館に 200 円を払って入場し、忍城や周囲の郷土史を勉強。それから建物の中の通路を通り、忍城の天守閣へ。

石田三成の城攻めにも耐え抜いた忍城は明治維新で取り壊され、昭和 63 年に 3 階の櫓が再建された。



忍城の 3 階櫓

その櫓に上がり眺めると、水の城も今や周囲は住宅ばかり。

秀吉の北条攻めで、城主の父と兄は小田原城に立てこもり、留守を任された甲斐姫は当時 19 才、800 人の城兵で秀吉方の石田三成の 2 万の軍勢の猛攻を凌ぎ、更に真田幸村や大谷吉継等の加勢の軍勢の攻撃にも耐えたという。このことを書いた「のぼうの城」は映画化され、記憶に新しい。なんと言っても、姫が先頭に立って戦ったとのストーリーが人を引き付ける。しかも敵将は石田三成、黒田官兵衛の高松城水攻めを真似て周囲に土手を作り、川を堰止めて水攻めにしたが元々沼沢地に囲まれた水に浮かぶ城、逆に土手が決壊して攻め手が何百人も死亡して失敗。やはり石田三成は戦下手らしい。北条氏の降伏に伴い、忍城は開城した。気になってその後の甲斐姫の運命をネットで調べた。

その後、甲斐姫は秀吉の側室となり、豊臣秀頼の娘・奈阿の教育係になります。

大坂夏の陣の後、甲斐姫と奈阿は徳川家康の娘・千により助命され、東慶寺に入ります。

この時、甲斐姫は奈阿に何か起こっては困ると、武装し波切を構えながら、大坂城を出て行きました。豊臣家を完全に滅ぼしたい家康は、一説によると密かに暗殺者を放っていたとも言いますが、甲斐姫がいるため手が出せず、奈阿は命を落とすことなく東慶寺に入れたのです。

甲斐姫は奈阿と共に、東慶寺で余生を過ごしたのです。（注：波切は甲斐姫の愛刀）

稲荷山鉄剣と雄略天皇

郷土博物館で、近くに「さきたま古墳群」があり、そこに稲荷山古墳があることを知った。

稲荷山と言えば「ワカタケルの鉄剣」、かなり前、新聞の 1 面に「ワカタケル(雄略天皇)」の銘のある鉄剣の X 線写真が載り、5 世紀に大和政権の支配が関東に及んでいた証拠と話題になっていたことがある。因みに、雄略天皇は、「5 世紀後半の天皇。允恭天皇の子、母は忍坂大中姫。諱(いみな)

はワカタケル(幼武, 若建), 宮は大和泊瀬朝倉宮」。奈良の桜井の家は朝倉にあり、地元の朝倉小学校の体育館工事に遺跡が発見され、朝倉宮の遺構ではないかと話題になったことがある。つまり、雄略天皇は地元出身、更にその母の忍坂大中姫の「忍坂(おっさか)」は地元にも残る地名。 ようし、またゆっくり見に来よう。

権八もの言い地蔵

忍城から吹上駅にバスで戻り、再び旧中山道に出て一路熊谷へ。

1時間強歩くと荒川の土手にぶつかるが、その手前に権八地蔵がある。



鳥取藩士の平井権八が、辻斬りを行った時に、現場で一部始終を見ていた地蔵があったので「このことを見ていたのは貴方だけ、黙っていてくれ」と地蔵に頼みました。その地蔵が「わしも言わぬが、おぬしも言うな。」と口をきいたとのお話がある。その後、権八は捕まり、磔になった。

この平井権八は講談・浄瑠璃・歌舞伎等の世界では、白井 権八として知られ、幡随院長兵衛の食客となり、歌舞伎では、長兵衛に「お若えの、お待ちなせえやし」と問われ、「待てとお止めなされしは、拙者がことでござるかな」と応える台詞が有名である。

荒川堤

権八地蔵の後ろは荒川の土手、土手に登ると視界が広がり、日本橋を出て初めて周囲が見える。周囲より高い土手に登って関東平野の広さを実感する。何しろ、北部にうっすらと稜線が見える低い山以外の3方は平地、ここから海までの間は平野ばかりで山はない。

土手を歩いていくと、「なつかしさのある匂い」が流れてきて、見ると酪農農家があり、牛が寝そべっていた。

酪農農家の牛



海まで70Kmの標識があり、更に歩いていくと69Kmの標識、おかしいなと思って調べると、下流に向かって歩いていた。権八地蔵の横に書かれていた「中山道は左」の標識は何だ!

午前中は曇りだったが、11時頃から晴天となり、今は日差しが強烈で眩しく「ピーカン」の晴れ、遮るものは何もない土手の上をひたすら歩く。

途中で、「決壊の跡」の碑を見る。昭和22年の台風でこの土手が決壊し、多数の人命が失われ、人家や田畑に甚大な損害が失われたとのこと。

土手を歩いていても川原の畑ばかりで流れは全く見えないが、昔は水量が多かったのだろう。また、冠水橋跡の碑もあり、増水時には水面下となる橋があったらしい。

決壊の跡の碑



熊谷宿 8 番目

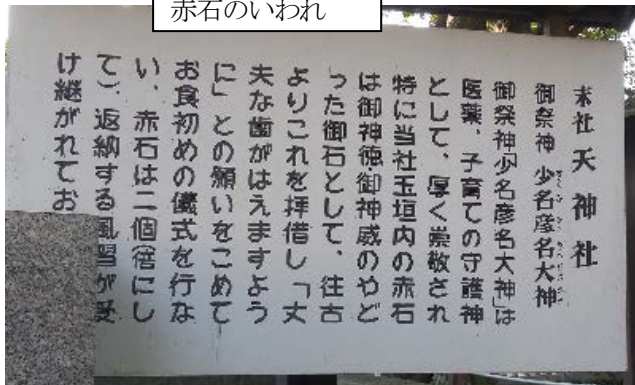
2 時間程あるいて、やっと 8 番目の宿場の熊谷に到着。

熊谷市内の中心部を通る旧中山道の通りの名は銀座、銀座 2 丁目、銀座 1 丁目等の標識を見ながらまずは高城(たかぎ)神社へ。ここは熊谷次郎直実の出身地で高城神社は熊谷氏の氏神。

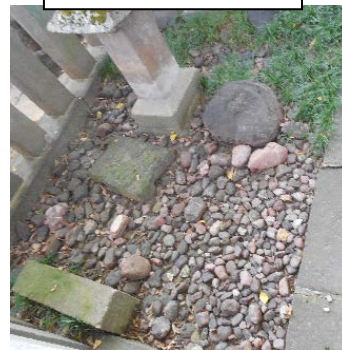
その高城神社の境内に小さな天神社があり、その小さな境内には赤石が置かれている。子供の「お食い初め」にこの赤石を 1 個持ち帰り、立派な歯になったら 2 個にして返す習慣だという。

1000 年以上前からの習慣だとすると、その境内は赤石の山になっているはずだが……

赤石のいわれ



境内の赤石



熊谷は私の出生地、但し、生後直ぐに両親の故郷である宮崎に引越したので、全く記憶は無い。そう言えば、ここに旧三洋の開発拠点があり、家電メーカーの技術者達が集まって世界に通用する日本の標準 PC を作り、NEC に対抗しようと熱い話し合いをしたことがある、あれから長い年月がたち、WINDOWS で世界標準が実現し、物づくりは中国へとシフトした。

熊谷駅に午後 5 時に到着、高崎線で帰途につく。「のぼうの城」に寄り道した為に時間の割には距離が伸びなかった。本日の歩数は 6 万歩、距離は約 42Km。最初は曇りだったが、途中より晴天、サングラスを忘れたので、紫外線が眼にきつく、翌日まで眼がショボショボした。

2日目

